社会福祉法人
ミッドナイトミッションのぞみ会

2009／8／1　No.51
発行者：社会福祉法人　ミッドナイトミッションのぞみ会
本　部：〒293-0023　千葉県富津市川名1436番地

親はなくとも子は育つ

常務理事
井本　義孝

八月が近づくといやでも当時のひもじい思いが想い出される。食料難、飢えの辛らさ、子に食べ物を用意出来ぬ親の気持ちはどんなだったろうか。一九四五年は遠い昔になったが、今も鮮明に残る。時代はかわり毎年何百万トンと捨てられる食糧、減反による休耕田の増加、ゲーム機、ケータイ、パソコン、ナビにテレビに全てデジタルの世となった。そして毎年三万二千人以上の自殺者、未遂者は約一〇倍の数。昨年児童相談所が受付けた相談件数約四万二千件、内半数が虐待問題。子ども達の安心安全の砦であるべき家庭基盤も、脆弱化している現状では社会的養護と言われる施設は不可欠である。本法人では三年前に「望みの門かずさの里」を、本年四月には乳児園「望みの門方舟乳児園」を開設した。前者は家庭的な暖もりが、少しでも感じられるよう、二室毎に浴室を設け、共同浴場式を廃止している。食事は一流シェフが腕を振るった味付け、盛り付けであり、こんなに美味しい食事ばかりで、卒園したら困るのではないかと冗談がでる始末。たまには飢もじい思いも体験させなければと考えている昨今ではある。この七月には「小規模グループケア」〝エデン〟が増築竣工、早速小学生五名が入居した。従って今後は、新しいホームが一つ誕生したこととなる。さて、本年新設の「方舟」は全面の張芝が活着し、一面の緑が雨に洗われ本当に美しい。赤い屋根、塔屋の十字架、緑の芝生と赤いブランコ、そこに白いポニーに乗った可愛い女の子が現れれば、メルヘンの世界に近くなる。「方舟」の環境は抜群、全体が木造の木の香新しい柔い感じ。広く周囲をめぐる廊下は子ども達の格好の遊び場。二才の子を頭に七名の乳児、配する一〇名の職員。毎日が「オンブ」「ダッコ」「ミルク」「オムツ」「遊び相手」「オヒルネ」と職員といえどもここでは全員母親。思いっ切り甘やかせて、恐らく終生消えぬであろう親から離れたショックを柔らげたい。「里」と「舟」の下には約一万三千年前から古代人が住んでいた遺跡が推定されている。言ふなれば古代文明の上に位置している。現代社会の歪がもたらした子等の災難を幸せにする役割をこの二つの施設は持つ。子等の成長のみならず、地域の人々の家庭支援も大きな仕事である。つまり子育て支援隊であり、お母さん達の力強い味方になることが肝要。今、「舟」の前庭の青々とした芝生は、新生舎二年目の田んぼの稲穂が青々と風が吹けば大きな波のようにそよぐその緑と共に「平和の象徴」シンボルカラーのようだ。平和なしには子供の安定した成長はない。四〇年前、ベーテルに居た、ドイツの兵役忌避者の青年達を想い出す。この日本

が平和を希求する限り、子ども達が兵役を課せられることはない。「平和国家日本、東洋のスイスは日本」と言っていた六四年前を思い出したい。そして福祉の仕事こそ平和を作り出す天職であることを誇りに思ふ。

バザーのご協力に感謝です。

望みの門学園
園長（バザー委員長）佐野　毅

今年のバザーは、六月六日（土）に行われました。あいにく当日は朝から雨模様でした。職員たちは、「今まで、望みの門のバザーは直前まで雨が降っていても、バザーが始まると不思議に雨が上がるんだよ。だから、今日も、もうじき止んでくるよ。」と好天を期待していましたが、私たちの祈りが足りなかったのか、雨は終日止む気配はありませんでした。

しかし、荒天にも係わらず、午前十時の開場を待たずして、早くも八時過ぎには、雑貨コーナー入口の前に大勢のお客様が、掘り出し物（安くて良いもの）を求めて並んでいらっしゃいました。ざっと拝見しただけでも八十人以上のお客様が、開場を「今か、今か」とお待ちいただいており、恐縮してしまいました。

残念ながら、雨天のため予定していた富津保育園の園児さんたち自慢の太鼓の披露や、君津ロータリークラブ有志の皆さんで結成した「百年記念バンド」のコンサートは取り止めとなってしまいましたが、雨にも係わらず各売り場には例年同様、大勢のお客様がいらしてくださいました。

望みの門バザーは、施設の開設当初から、地域の皆様や教会関係（特に京葉後援会）の皆様方のご支援ご協力に支えられて今日まで開催して参りました。従来は、春（六月）と秋（十一月）の年二回開催しておりましたが、三年前に児童養護施設「望みの門かずさの里」を開設したことにより、秋のバザーは「望みの門かずさの里」（富津市上総湊）で行うこととなりました。

私は今回、初めてバザー担当となり、ご支援くださっている方々のお宅に献品をお預りに伺う機会に恵まれましたが、そこで分かりましたことは、望みの門の開設当時から四〇年余に渉って毎年ご協力くださっている方や、お宅によってはすでに代が替わられて、娘様やお孫様に引き継がれてご支援くださっておられるご家庭が数多くあることが分かりました。

県内の教会関係の方々や日頃ご支援くださっている方々、また地域の方々のご家庭をお伺いさせていただくことにより、私たちのはたらき（望みの門のはたらき）が、如何に多くの方々のご支援と祈りのうえに成り立っているか、ということを改めて肌で感じ取ることができました。

バザーのために品物をお預かりして、それに値段を付けて当日いらっしゃったお客様に提供し浄財を得る、という一連の作業の中に、日頃ご支援くださっている方々の計り知れない多くの暖かいお心が染み込んでいることを改めて思いながら、感謝をもって報告といたします。

ありがとうございました。

望みの門楽生園・望みの門在宅部門
望みの門紫苑荘

ISO9001 第二回維持審査及び二〇〇八年版移行審査に合格！

総務課　菊地　正弘

四月三十日、ムーデイ・インターナショナル・サーティフィケーション（MIC）による、第二回維持審査と二〇〇八年版移行審査を受審し、何れも合格しました。

二〇〇八年版への移行審査は、昨年十一月にISO規格が改定されたことにより、二〇〇〇年版で認証取得の事業所は、遅くも来年の八月三十一日までに、二〇〇八年版への切替え、合格が必要なことから、今回、第二回維持審査の中で受審したものです。

審査は、楽生園と在宅部門を主体に、紫苑荘も含めた全体の品質マネジメントシステムが機能しているかどうか、MICより審査員二名が来訪され行われました。結果は、二〇〇八年版品質マニュアル及び規定類に違反しているような不適合事項はありませんでしたが、観察事項として二件（次回に対策報告が必要）、また、改善事項として五件（対策報告は不要）の指導を頂きました。更に、優れた点として二件を挙げて頂きました。

次回は、更新審査となり全部門が対象予定ですが関係者一同、引続きPDCA（計画・実行・チェック・改善）の向上に努力してまいります。

望みの門紫苑荘

二〇〇八年度安全衛生優秀職場に！

望みの門紫苑荘は、安全衛生委員会（委員長・井本常務理事）による職場巡視の指摘事項対策と予防処置に積極的に取組まれました。また、長期間の増改築工事においても無事故であったことが評価され、安全衛生優秀職場として六月八日の幹部会議で木下理事長より表彰されました。

安全衛生委員会の職場巡視は、本年度も継続実施しております。

宿泊所婦人ホーム　東京望みの門

ヘットカンプ先生

生活指導員　高杉　至子

東京望みの門は今年で設立五十三年を迎えました。この長い歩みの中、昨年秋十一月に設立三年目から二十二年間望みの門をはぐくんで育ててくださったルツ・ヘットカンプ先生が旭日双光章を受章されました。ドイツにお住まいの先生は東京都社会福祉推進課より受章の知らせがあった時『カイザルのものはカイザルに、神のものは神に』のみことばを元に熟慮されたうえ、来日を決められたとの事でした。十一月十一日、都知事特別室にて厳かに伝達式が執り行われた後、いのちの電話の創立にも貢献された先生はボランティアの方々のお祝いの集いの中で、ゴッホの種を蒔く人のカードの絵を指さしながら「『ひとりは種を蒔いた、他の人は水を注いだ。それぞれに神に与えられた分に応じて仕えていますが、植える者も水を注ぐのも共に取るに足らない』長い歴史の中、皆で協力しあった受章です。愛である神がまず私たち一人一人の心の中に愛と魂を注ぎ続けてくださるように、そしてそれはあらゆる重荷を負っている方々の心の中にいのちの泉となりますようにお祈りします。」と挨拶されました。

ヘットカンプ先生は戦後の混乱期に日本のキリスト教会指導者からの売春問題のため働き人を送ってほしいとの要請に応えドイツのMBKミッション・婦人聖書研究会から派遣された宣教師のお一人です。私どもは先生のこのことばを改めて心に留め、この家の働きを続けていけるよう歩んでまいりたいと思います。

婦人保護の仕事に加え三年前より低年齢者のための自立援助ホームの働きも増え、さまざまな事情ですぐに一人暮らしができない娘たちと共に生活しております。家庭が崩壊している娘、虐待から逃れてきた娘、精神的、知的なハンディキャップをもつ娘など、抱えている問題はそれぞれ違いますがこの寮を利用する一人一人が一人一人のできる事に合わせて本人の望んでいる形での自立ができるようにお手伝いをすることが私たちの役割だと思っています。望みの門の働きに神様が愛と魂を注ぎ続けてくださいますように。

婦人保護施設　望みの門学園

『千葉県教会音楽祭に向けて』

作業指導員　山口　寿美子

学園の一日の活動は、賛美歌の歌声から始まります。

利用者・職員共に一体となり「手話」による賛美歌の練習に取り組んでいます。

毎年、「望みの門教会」として参加させていただいている「千葉県教会音楽祭」（南ブロック）に於いて、昨年度初めて「手話」による賛美歌での参加をしました。県内を南・北のブロックに分かれての音楽祭で、一三もの教会が集まり開かれるものです。私たちの最初の課題は「手話とは何か？」という初歩的な勉強からのスタートでした。

昨年度は、鈴木洞子先生の指導のもと、利用者二二人、目で耳で体で全員一丸となり手話の練習に励み、本番にたどり着くことができました。曲目は「主われを愛す」「キリストは生きておられる」の二曲でした。伴奏は木下晃子先生が引き受けてくださいました。

今までとは違い歌だけではなく　手の動きが入るとなるとこれは「至難の業」としか言いようがありません。右手と左手の違う動き。それぞれの手の持つ意味。歌に集中すれば手がおろそかになり、手に集中すれば歌がおろそかになりと…本番が近づくにつれ皆必死でした。もちろん職員も同じです。ほとんどの人が手話を披露するのは初めての経験でしたが、一つ一つの形をマスターし、自信と共に積み重ね、本番を迎える事ができました。

当日は　練習の時よりも何倍も出来栄えが良く、他の教会の方々からもお褒めの言葉をいただきました。木下晃子先生、鈴木洞子先生の両先生のお導きがあったからこその賜物ですが、利用者二二人全員心を一つにして成し遂げられたことで非常に多くの事を学びました。

二〇〇九年九月二十一日。今年の「千葉県教会音楽祭」の日です。今年度は南・北ブロック合同という大イベントとなり、合計二七教会の参加となります。会場は千葉市民会館という大舞台です。私たちは、迷うことなく今年も「手話による讃美」を選びました。曲目は「いつくしみ深き」「歌いつつ歩まん」に決まりました。

本番に向け、毎日毎日それぞれが「悪戦苦闘」し取り組んでいます。望みの門学園から歌声が聞こえてきたら、心の中で応援してくだされば幸いです。今年もこのような機会を与えてくださった事に感謝いたします。

養護老人ホーム　望みの門楽生園

望みの門楽生園施設長就任挨拶

施設長　白鳥　正道

この度、井本常務理事の異動に伴い後任を命ぜられ着任いたしました。微力ながら職責を果たしたく何卒皆様にはご指導、ご鞭撻賜りますよう心よりお願い申し上げます。

早いものでのぞみ会へお世話になって十五年が過ぎました。当初は只、「社会福祉」に係わった仕事がしたいという一念だけでした。初めは一日を無事終えることで精一杯で、やりがいを感じたり、楽しんだりということもできませんでした。三ヶ月を過ぎたころから、ようやく色々なことにちょっとした楽しみを発見できるようになり、本当にやりがいのある仕事だと実感できるようになりました。それから五年間特別養護老人ホームで「寮父」として働かせていただきました。平成一一年四月から現在まで「生活相談員」として楽生園にお世話になっています。楽生園では初代園長の木下弘人先生にたいへんお世話になり、笑顔がとても印象的で利用者からも一目置かれる存在でした。先生はたびたび「楽生園は、何処にも受け入れ先のない人の最後の受け皿でなければならない。それが楽生園の存在意義である。」ということを話され、これは、今後も楽生園の方向として見失ってはならない目標だと感じています。

現在、制度改正に伴い養護入所者でも介護保険サービスを利用することができるように

なり、全国の各法人、各施設は自分達の老人ホームがどの制度で運営していくか自ら選択しなければならない時代になっています。楽生園も、デイサービスや在宅サービス、ホームヘルプサービスとも連携強化をはかり、今まで以上に幅広くサービスを提供できるように変わってきました。実施機関からの入所依頼も、介護度のついた方の依頼も増え、元気な老人だけを見ていた時代とは大きく変わってきていることを実感します。一般社会でもネグレクトなど、一時避難場所として養護老人ホームが果たすべき役割がますます重要になっています。

施設を取り巻く制度や役割が変化しつつある現在、先を見通す必要性と果たすべき重責を真摯に受け止め、職員一人一人が良い香りを放つものとなれるよう日々祈り励んでまいりたいと思います。

特別養護老人ホーム　望みの門紫苑荘

新たな歩み

施設長　簾　昭博

増築工事を終えて、早半年を迎えようとしています。四月の機関紙でご案内の通り、二月二四日竣工後、施設の環境は大きく変化しましたが、半年も過ぎると皆さんすっかり馴染まれているようです。二階の食堂では、食事以外でも皆さんが集まり談話をされている姿を拝見しますと、やはり改修してよかったという思いを再確認しているところです。

さて、五月から六月にかけて毎年恒例の遠足行事を実施いたしました。各フロア五～六名のグループ毎に思い思いのところへ出かけてまいりました。金谷の「かなや」では、新鮮な地魚の刺身やてんぷらを、君津の「とんでん」では、海産物をご馳走になりました。皆さん普段以上に良い表情をされていて、食欲旺盛でいつもより沢山召し上がられていました。秋にも遠足を予定しております。実りの秋に季節を感じられるおいしい食べ物と、紅葉狩りなどを皆様に楽しんでいただければと考えております。

紫苑荘の今年度の大きな事業としては、施設開設以来三〇年間利用してきたエレベーターの改修が大きな課題となっており、八月から一〇月にかけておおよそ一ヶ月間の工期で実施予定しています。この事で利用者様並びにご家族及び関係者の方々にご迷惑をお掛けすることとなりますが、ご理解ご協力の程、宜しくお願いいたします。

尚、直近では八月に納涼会を開催いたしたく、あらためてご家族の参加ご案内をいたしますので、ご予定くだされば幸いです。

老人デイサービス事業　望みの門デイサービスセンター

富津市　地域支援事業として望みの門通所介護予防センター　オープン

副施設長　白鳥　尋子

平成二一年五月二一日、望みの門紫苑荘一階に増築されたリハビリセンターが、通所型介護予防センターとして開所、七月からは在宅三部門の仲間入りをし、デイサービス管轄として行っております。

運動機能指導員の資格を取得していらっしゃる井本常務理事を中心に職員三名で行われている、今は小さな事業所です。

介護予防センターとは、富津市の事業の一つであり、富津・大貫・佐貫地区周辺が望みの門で委託されました。

対象者は、要介護認定・要支援認定を受けていない六五歳以上のお年寄りですが、その中で市が定めた身体内・外チェックリストにより、一般高齢者(事業)と、特定高齢者(事業)に分けられます。

一般高齢者（事業）とは、全く生活する上で問題なくお元気な方々が、機能の向上・維持はもちろんのこと、生きがい・活気のある生活・引きこもり防止などを目的として、集まり、心身ともに楽しんでいただく事業です。老人クラブのようなイメージをしていただけると良いと思います。この事業は、市がまだ準備段階にあり、今後委託される予定となっておりますが、事業が開始した際は、私たち職員が会場を訪問し、機能向上のためのレクリエーション・栄養面や、身体面のお話しを等、生きがいのお手伝いを行う予定となっております。

特定高齢者（事業）とは、主に要介護状態等となる恐れの高い状態にあると認められた方が参加でき、現在実際に行っている事業です。

要介護認定となることを予防し、活動的で生きがいのある生活や人生を送ることができるよう支援することが目的です。

地域包括支援センターより個々の介護予防サービス計画書に基づき、センター側での個別サービス計画書を立て、三ヶ月を一クール、同メンバーで実施します。

現在の第一期メンバーは女性六名。皆さん家事をこなし、バイクや自転車で田や畑に出たり、老人クラブに参加したり…元気に生活されている方々ですが、〈歩く〉という動作が減っている為、近所に行くにも疲れてしまい、休憩を何度も取ってしまう。そのことにより外に出る機会が減り、なお更、歩行が不安定～と悪循環が伴い、下肢筋力低下が進んでいるのが現状。数年前のように歩けるようになりたい！という希望・目標を持っている皆さんです。

週一回木曜日九時から一二時までですが、実際は送迎があるため、機能向上プログラムを行うのは、一時間半という短時間、マットを使った柔軟体操や椅子に座ったまま道具を使って体をほぐす体操等、日によりプログラムを変えて行います。また、全てに対し、自分のペースでリラックスし、マイペース、そして一番大切なのは脳みそを使うこと。頭の中で、自分自身が行っている動作をイメージすることにより、脳から指令を出して、手足を動かすよう声かけを行っております。

皆さん集中して行い、終了時間には体が軽い・背中が伸びて気持ちがいい…等、嬉しい声と、笑顔が見られます。

現在のメンバーで行うのは残り一ヶ月となりましたが、最終日の体力測定では少しでも成果が出るよう、皆さんの願いに応えられるよう支援したいと思います。

委託の事業のほかに、井本常務理事が中心となり、職員のためのメタボ撃退レースを行っております。個々に希望減量数値を定め、一二月一日に一番減量数の多い方が優勝！

井本常務理事より商品が出るそうです。体重は公表する必要はありません。月一回測定し、減量数を報告していただきます。（自己申告）現在、施設長・看護員・介護員・栄養士・調理員・支援員等、様々な職種の方一一名がエントリーしております。予防センターを使って行うも良し、自宅で行うも良し。

自ら定めた目標に向かって、皆さんもレースに参加しませんか。随時受け付けておりますので、デイサービス白鳥・渡邊に声を掛けてください。

知的障害者授産施設 望みの門新生舎

「エコクラブ 本格始動！」

副主任作業指導員　渡邊　宏子

新生舎では平成一九年にビニールハウス二棟を建設し、野菜や花卉栽培をはじめとする農耕を主軸とした作業が始まりました。平成二〇年度には休耕田を三年かけて開拓し、秋には「のぞみ米」として収穫するなど、この二年間エコクラブにとっては一大変革の年であったように思います。

そして今年度。二年間で蓄積したノウハウを最大限に発揮する年として利用者一三名と共に奮闘している真っ最中です。

私自身、農耕作業は家庭菜園程度の経験と知識しかなく、拡大した畑を有効に活用するといっても、何をいつ？どの位蒔いて植えるの？年間栽培計画といっても…？というのが正直なところでした。教えて頂いた通りの実践が始まり、なるほど、こうやればこんな風になるんだ！と季節の経過とともに判り始め、一年過ぎるとこれまでにない数々の成果が現れていました。その中でも一番の成果としては、利用者へ提供する作業量とその質の高さです。それまでの作業は、農耕・リサイクル・洗車・環境整備等を組み合わせ、計画を立てながら進めてはいたものの、系統付いた支援や指導として十分なものではなかったのではないかと改めて考えさせられるところでした。計画的な作付けによる作業により、

毎日のやるべきことが明確になり、利用者個々の持つ能力を活かした作業が展開出来るようになりました。障害特性によって作業種に得手不得手があるため、作業工程を細分化することで個人のできることを見つけ出し、一連の作業を完成させる。継続して取り組むことで確かな力となり、「自分達もできる」という自信に繋がってきました。「地域で暮らす」と大きく叫ばれている中での施設の役割とは？を考えると、私たちの取り組みは小さな働きにしか過ぎないかも知れませんが、毎日店頭や販売に出す野菜や花には「できる」自信が現れるようになってきていると実感しています。地域に出向いた時、「立派な野菜だね！」・「あんた達が作ってんの？すごいね！」・「おいしかったからまた買いにきたよ！」と声を掛けて頂くことで、自分たちの活動を知ってもらい認めてもらい、仕事に対する自信や誇りが芽生えてきているように感じます。エコクラブの新たな取り組みはスタートしたばかりですが、作業を通して社会の中で役立っているという実感を味わいながら利用者支援が本格始動した年度であると言えます。

一体型共同生活介護事業所 グレースホーム

グレースホームの「一泊旅行」

主任世話人　藤崎　美智

グレースホームでは、七月四日、五日と恒例となった夏季親睦旅行に行ってきました。場所は、いこいの村たてやまです。実は毎年行き先を検討するのですが、利用者さんにとって、安心・安全で移動時間もさほど長時間ではなく、送迎のあることも選定条件になってきます。その点、いこいの村たてやまは、殆どがバリアフリーになっており、高齢化して階段や段差が苦手となってきた利用者さんには安心できるホテルです。また、ホテルの従業員の受け入れ体制も慣れていることもあり、今回もいこいの村たてやまを利用することになりました。ただちょっと残念なのは、お忙しくて井本常務理事の参加を得ることができず、利用者さんにとっては少し寂しい旅行となってしまったことです。

旅行当日は、昼食を食べてからのゆっくりした出発です。ホテルの迎えのバスに乗り込み、いこいの村たてやまを目指しました。約一時間ほどでホテルに到着し、それぞれの部屋に入り、お茶で一服。新しい場所や環境に戸惑ってしまう利用者さんですが、三年連続して宿泊していることもあり、緊張した表情も見せません。それどころか、もう気持ちは「温泉に入ろう！」「宴会は何時から？」「おみやげはどこで買おうか？」と普段と変わりがありません。やはり利用者さんは場所が変わるより、慣れたところが良いのかなあ…。

夕食前には、それぞれゆっくりと海の見える温泉に入り、日頃の疲れを癒してのんびりしました。また、夕食時の宴会では、三橋管理者からの挨拶、牧野さんの乾杯の音頭にて大宴会の始まりです。お刺身はもちろんのこと、蟹・エビなどの海鮮しゃぶしゃぶなどに舌鼓を打ちながら、恒例のカラオケと大いに

盛り上がり、時間の経つのを忘れるほどでした。

さて、翌日はレストランでバイキングの朝食。楽しくて夜眠れなかった利用者さんも食欲のあること!!びっくりです。朝食後、ホテルをチェックアウトし、君津にある四季の蔵を目指して出発。四季の蔵では、おみやげなどを買ったり足湯につかったりと、それぞれお昼まで楽しむことができました。お昼ご飯は、四季の蔵にある季楽里にてお寿司などのご馳走をいただき、グレースホームに帰ってきました。

こうして、今年の一泊旅行も、事故もなく無事に終えることができました。毎年同じ場所で、一見変わり映えがしないようにも思えますが、みなさんに満足していただけたようで、帰ってからもそれぞれ旅行の思い出話に花が咲いているようです。来年も全員揃って参加できるよう、日々の健康管理に努めながら、利用者の状況にあわせた旅行を、計画していきたいと思っています。

地域活動支援センター　望みの門ヨカデイサービスセンター

踊りに夢中

副主任指導員　南雲　いずみ

今年も暑い夏がやってきました。

私たちは今、踊りに夢中です。今年は「炭坑節」「やっさいもっさい」「好きになった人」の三曲を中心に踊っています。雨の日や、カンカン照りの日などは、ウォーキングや散歩で外に出る時間が短くなり、運動不足になりがちです。曲に合わせて踊ることにより背中を伸ばし、手を挙げ、体をねじるという動作が出来、日頃はあまり行わない「後ろ歩きの動作」も自然に出来ます。また、大きな声を出すことにより、ストレス発散の効果もあります。「好きになった人」は、椅子に座っていても踊りの輪に入れますので、みんなで楽しめます。

踊りは皆さんの顔が朗らかになります。また、昨年から、七月二〇日（海の日）に「どたばた連」（木更津港祭り「やっさいもっさい」の踊りの連）の皆様にボランティアで来て頂き、望みの門新生舎の芝生広場で、ヨカデイ「ミニ夏祭り」を開催しています。地域のボランティアさんたちから新鮮な風を吹き込んでいただき、楽しい時間を過ごしたいと思っています。

その日は、「お楽しみ活動」（今年度から始めた活動）で製作した「世界に一つだけの作品」（ヨカデイセンター裏の菜園で咲いた春菊の花で染めた「ハンカチ」と、自分の手形を押した「うちわ」に、好きな絵や写真を貼ったもの）を持って参加します。

利用者の皆さんが、「七夕のお願い」にご自分やご家族のご健康を願っていました。これからも皆さんのご健康に配慮しながら、安全・安心で楽しい日中活動の支援を心がけていきたいと思います。

中核地域生活支援センター　君津ふくしネット

君津ふくしネットのメンバー紹介

センター長　西山　信男

千葉県独自の制度で平成十六年に田尻センター長（現、望みの門方舟乳児園園長）の下、スタートした中核地域生活支援センター・君津ふくしネットは着実な歩みを重ねて参りました。時々メンバーも代わりましたが、本当に多岐に亘る諸々の相談が増え続けております。昨年度も、健康福祉千葉方式により「誰もが、ありのままに・その人らしく、地域で暮らすことができる」新たな地域福祉像の実現をめざして、対象者横断的な福祉の総合相談窓口としての役割を果すべく、佐野センター長（現、望みの門学園園長）の号令一下六五八九件の受付け、相談対応を行なうまでになりました。

これまで就労に特化した支援活動を続けていた関係で、君津ふくしネット内では自分の

ペースでスケジューリングしていた私は、四月よりセンター長を拝命し、総合相談支援（コーディネート）・夜間相談・事務処理・管理業務を始めることになり、ビックリ大忙しの毎日です。

昨年一一月より専任の相談支援員となった横浜副主任は、平成一六年スタート当初からのメンバーで生き字引です。障害児・者担当の大谷コーディネータは、二年目で実力発揮を大いに期待しています。新卒の鈴木ＣＯは、ニヒルな容姿に反して、支援に熱く深く係わるナイスガイです。伊藤・桐谷の両障害者グループホーム支援ワーカーは、全県域の情報交換を日々重ね、活動を展開しています。

さて、改めて五年の継続を振り返り、どんな時でも我々君津ふくしネットのメンバーは、圏域の障害のある人もない人も、老若男女・不特定多数の方の相談窓口として、望みの門の基本理念である「福祉サービスを求める人々の人格と権利を尊重し、キリストの教えにしたがい最適な福祉サービスの提供を約束します。」を肝に銘じて、二十四時間・三六五日体制で福祉相談の対応を行なって参りたいと思います。

児童養護施設　望みの門かずさの里
『幼児に囲まれて』

指導員・心理士　川澄　耕一郎

幼児期になると個人差はあるもの頑固な自己主張に周囲の大人は困り果ててしまうことがある。かずさの里でも例外なく日々その場面が生まれている。加えて一人ひとりのこれまでの育ちによる影響も見え隠れしている。私が幼児たちと生活をともにして三年、最近になってよくよく実感するのは、幼児期の自己主張というのは、成長の証しだということである。「今日はお昼寝しない！」「早くお外で遊びたい！」「これ食べたくない！」などなど、自分の気持ちを通そうと一生懸命がんばっている。こういう自己主張を積み上げて行く姿は、子ども本来の育ちの中で社会性の一歩として、身につけていくものである。

一方、残念なことではあるが、年齢に相応しない未熟な自己主張しかできない子もいる。これまでの生育の環境が影響しているだろうことは想像に難くない。子どもは身近な大人に受け入れられることが生存に関わるので本能的に周囲の大人の要求に合わせる。それが身についている子どもは、頑固な自己主張がなく、一見「よい子」に見えたりするが、いつも大人の期待に合わせている子どもは「自分」が育っていない。「よい子」と見られていた子どもがある年齢になると問題を生じやすいのは、大人の期待や要求に応えるあまり「自分」が育っていなかったことに因るのだろう。

そういう意味では、おもちゃの取り合いなどでケンカをしはじめるのを見るとほっとする。大人への自己主張ももちろんだが、子ども同士の率直な関係は「自分」の成長にとって掛け替えのない体験になるだろう。

かわいい子ども同士のいさかいを見るのはつらいことではある。私などは思わず仲裁に入りたくなってしまう。つらくはあるが、これが子どもの成長だと気持ちを決めて、温かい目で見守っていきたいと思うこの頃である。

乳児院　望みの門方舟乳児園

歩み出した望みの門方舟乳児園

園長　田尻　隆

この四月に開設した望みの門方舟乳児園は四カ月が過ぎ初めての夏を迎えています。庭の芝生はきれいに根付き一面に緑のじゅうたんを敷き詰めたようです。この庭からは東京湾が一望でき天気の良い日には対岸の久里浜や海ほたる、富士山も美しい姿を現します。草木の緑や大空・海の青、私たちは房総の豊かな自然と色彩に育まれ、現在八名（定員九名）の子どもたちと一緒に生活しています。子どもたちとの毎日は新たな出会いの連続です。今までなかった子どもの表情と出会い、いつの間にかスプーンを持つ手の動きや、懸命につかまり立ちをする足の動きに出会います。初めて子どもと乗るブランコの風を切るさわやかさに出会い、子どもの寝静まった深夜「キーン」と響くかのような静けさと出会います。どの出会いにも新しい発見があり、そこから驚きや喜びが生まれてきます。

さて「望みの門方舟乳児園」の名前は旧約聖書「ノアの方舟」物語に由来します。神さまは地上に増えた人々が悪を行っているのを見て、これを洪水で滅ぼすと「神に従う無垢な人」であるノアに告げ、ノアに方舟の建設を命じます。ノアとその家族八人は一生懸命働き、その間ノアは大洪水が来ることを前もって人々に知らせますが、耳を傾ける者はいませんでした。ノアは方舟を完成させると、家族とその妻子、すべての動物のつがいを方舟に乗せました。洪水は地上に生きていたものを滅ぼしつくします。水は一五〇日の間、地上で勢いを失いませんでした。その後ノアは鳩を放すと、鳩はオリーブの葉をくわえて船に戻ってきます。ノアは水が引いたことを知り、家族と動物たちと共に方舟を出ます。神さまはノアとその息子たち、後の子孫たちを祝福しその契約の証として空に虹をかけたといいます。

鳩が届けた小さなオリーブの葉はノアにとって大きな「希望」となりました。「希望」は決して華々しく輝かしくやってくるものとは限らないようです。一枚の小さな葉から私たちはそれまでの辛さがそこで終わり、新しい力が湧いてくるように感じることができます。私たちの小さな働きが子どもたちにとって新しい希望となりますよう、また子どもたちとの生活が神さまに祝されその小さな歩みが望みの門方舟乳児園に関わる全ての人たちの希望となりますようお祈り致します。

編集後記

梅雨明け宣言後の集中豪雨、山口県の特養施設の被害は他人事ではない。亡くなられた方々をはじめ関係者の皆様に、天父の御慰めを心から祈りたい。「のぞみ会」は今や東京からスタートし、富津・湊へと千葉県の中央部に福祉拠点が出来た。この八月末には昭和三〇年以来の政治体制が変革すると大方が予想している。激変する生活環境、アナログ社会からデジタル社会に変貌しても、人は病み、老い、人生苦は絶へるどころか増す一方である。六月から望みの門学園の新藤心理相談員を中心に、「望みの門心理研究会」が発足した。被虐待児の心のケアのためにも、高齢者にも、又、施設職員のためにも心理学の素養は必要となった。今後、読書会等の誕生も望まれる。さて、一〇月七日にはG・シェアー先生とお二人のドイツ婦人、ゾンタークさんとヘンデルさんが来日される。本年から始まる「日独福祉職員交換研修」の第一期生である。このために、過日の法人運営会議に於いて、「日独福祉職員交換研修」運営委員会の設置が協議された。委員には「西尾、西山、戸波、佐野、新藤」の諸氏が予定されている。

（Y・I）